

古波倉正照先生を偲んで 数々の思い出とともに



那覇市医師会 長嶺 信夫
(e-mail : nagamine1128@yahoo.co.jp)

2024年10月15日、敬愛する亡き恩師・古波倉正照先生のお嬢様・史子先生から久しぶりに便りが届いた。

私が沖縄県医師会報2024年10月号に投稿した稲福全三先生に関する追悼文の中に古波倉正照先生のお名前を見かけたこと、勤務している浦添総合病院で稲福全三先生の最期に立ち会われたこと、それと史子先生の近況がしたためられていました。

思い出すのは、8年前の2016年7月26日火曜日の午後のことです。翌日からのヨーロッパ・アルプス旅行の前に、糸満市に開設した沖縄菩提樹苑へ向かう車の中で鳴り響いた家内からの電話でした。

電話の内容は、史子先生からの古波倉正照先生に関する病状報告でした。

古波倉先生には毎年暑中見舞いの便りを出し、その中に旅行日程も記載していました。

史子先生は、私達家族の旅行中、古波倉先生に「もしものこと」を思い、その前に一目古波倉先生にお会いしてお別れの挨拶をする機会を与えてくれたのです。

帰宅して服を着替える時間もなく、糸満市から作業着のまま那覇市久茂地にある古波倉先生の御宅を訪ねました。

奥まった部屋に古波倉先生がベッドに横たわり、史子先生と本土で医師をなさっている妹さんが付き添われていました。

私は部屋に入る前からすでに涙があふれ、言葉がでません。古波倉先生に手を合わせ、何度も「ありがとうございます」とお礼を言うのが精一杯で、古波倉先生も軽くうなずきながら私に向かって手を合わせていました。

後ろ髪をひかれる思いで帰途に就いた翌日、沖縄を発ち、イタリア経由でヨーロッパ・アルプスを訪れました。美しい山々を眺めながらも古波倉先生のことが脳裏から離れません。

帰国後に沖縄県医師会報表紙に投稿した写真のコメントがあります。

「心の安らぎを求めて、ヨーロッパ・アルプスの旅に出た。山麓にはアルプスの少女ハイジの小屋があり、色とりどりの花が咲き乱れていた。娘・小緒里と競ってカメラを向けた。シャッターを切る娘のそばで、私は数日前に最期の別れをした亡き恩師・古波倉正照先生に思いを馳せていた。師は慈愛とともにユーモアに富み、自然を愛し、平和を強く願い、奥様、御家族、そして琉球泡盛をこよなく愛した。私にとっては、人生と医学の師であり、師を知る県民にとっては、医師の鑑（かがみ）であった。天空に向かって、師の恩に感謝の祈りを捧げた」。

帰国当日、すぐ古波倉先生の御宅を訪ねました。古波倉先生は私が最後にお会いした4日後の2016年7月30日にお亡くなりになっていました。

古波倉先生が最期を迎えた部屋には小さなテーブルと椅子が新たに設置されていて、史子先生が改めて古波倉先生の病状と最期の様子を話してくださいました。

古波倉先生は御高齢になっても、毎年開催される旧制高校の寮歌祭に参加されるのを楽しみにし、高下駄を履きながら肩を組み、高々と寮歌を歌い上げていた。

2016年6月、軽い脳梗塞にかかり、その後、次第に食が細くなっていきました。

しかし、病床にありながらも、お嬢様方とシューベルトの「野ばら」をドイツ語で熱唱、



写真 1. 古波倉先生宅を訪問して
2003 年 5 月 1 日撮影



写真 2. 沖縄菩提樹苑植樹式典にて
写真左から対馬丸記念会 高良政勝先生 古波倉正照先生
長田紀春先生 稲富洋明先生
2004 年 5 月 30 日撮影

時にはお嬢様たちに間違いを指摘し、正しい歌唱を指導していました。

♪ Sah ein Knabe ein Röslein stehen, Röslein auf der Heiden ♪

病床の古波倉先生を囲んで唱和する姿が目に浮かびます。御家族は涙をこらえながら唱和していたことでしょう。

御家族に延命処置が必要でないことを伝え、水分補給で OS-1 を勧めると「水道水でよい」と話していたそうです。

最愛の御家族に抱かれながら、安らかに永遠の眠りについたのでした。

私は史子先生から話を聞きながら、とめどなく涙が流れていました。

生前、古波倉先生は泡盛が大好きで、訪問時古酒を持参すると大変喜ばれていました。御家庭では愛妻家で知られ、奥様が亡くなられた後も納骨することなく、御遺骨を仏壇に祀られていたのを思い出します。

私が古波倉先生に初めてお会いしたのは、私が媒酌人をお願いした時でした。古波倉先生は戦前の沖縄県立二中から旧制五高を経て名古屋大学で学び、私は徳島大学卒ですが、私の兄・功一が名古屋大学卒で、日頃から尊敬していた古波倉先生に媒酌人をお願いしたことがあり、私もその縁で古波倉先生に媒酌人をお願いしました。

50 年前に徳島から帰郷後も、私生活や学

術面で古波倉先生に大変お世話になりました。私にとって慈父のような存在でした。

古波倉先生は開業医で御多忙にもかかわらず、研究意欲が旺盛で世界で初めて「a2-PI 欠損症」という血液疾患を発見し、国内外の学会で高い評価を得ています。また長年沖縄県医師会医学会会長をなされ、学術面で後進の指導育成に貢献なさいました。これらの功績で、日本医師会最高優功賞、那覇市政功労者表彰、琉球新報賞を受賞しています。

私が糸満市の魂魄の塔に隣接した南部戦跡に「沖縄菩提樹苑」を開設した時、古波倉先生は第二次世界大戦時、シンガポールなど南方で軍医として従軍していた関係で、戦没者を慰霊し、世界の恒久平和を祈念する菩提樹苑開設を大変喜ばれていました。いま、菩提樹苑入り口には古波倉先生の御寄付で建てられた「沖縄菩提樹苑」の石碑が立ち、来苑者を迎えています。

お亡くなりになったときは、古波倉先生があまりにも身近におられた関係で追悼文が書けませんでした。お亡くなりになって 8 年が過ぎましたが、史子先生から便りをいただいた機会に追悼文をしたためました。

敬愛していた古波倉正照先生が亡くなり、今年また稲福全三先生が亡くなり、寂しい限りです。あらためて御指導いただいた両先生に感謝するとともに御冥福をお祈りいたします。ありがとうございました (2024 年 10 月 20 日記)。